

説教『一つの言葉に様々な恵み』山本 護 牧師
聖書 詩編 62:10~13/マルコによる福音書 10:46~52

「人の子らは空しいもの。人の子らは歎くもの。共に秤にかけても、息よりも軽い(詩編 62:10)」。ここでの「人の子」とは新約とは異なり、「神に従う民」といった意味あい。神の民は世にあって「息よりも軽く」扱われる。だが「力が力を生むことに心を奪われるな(62:11)」。「力が力を生む」とは、何か量的に大きい力を想像させる。多くの金、多くの領土、多くの兵器、多くの人々の支持。

表現の自由を唱えて300万人以上のデモが起こったフランス。深読みすれば底意も指摘できようが、我が国の政治状況や民の感覚と比較すると、まぶしく感じられる。あれほどの数の力で、未来に何を描いているのか。日本のキリスト者は昔も今もわずかで、世俗的な力にはなりにくい。その分だけ他国に比べて教会の濁りは少ないが、偉そうな態度には「偽善じゃないか」と敏感に反応してしまう。

イエスが盲人バルテマイを回復させた奇跡からも、量的な力ではなく質的な何かが予感させられる。盲人がイエスに「わたしを憐れんでください」と言い始めると(マルコ 10:47)、「多くの人が叱りつけて(続けざまに)黙らせようとしたが、彼はますます、[ダビデの子よ、わたしを憐れんでください]と叫び続けた(10:48)」。

民主主義のルールでは多くの者を手当てしがちだが、世の問題は少数者にこそ現れる。その例は枚挙にいとまがないが、少数の場から全体を眺めると課題の奥底が見えて来る。

「イエスは立ち止まって、[あの男を呼んできなさい]と言われた(10:49a)」。

するとどうだろう。口々に叱っていた多くの者たちは、「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ(10:49b)」と盲人を呼んだ。一人の盲人の訴えをきっかけとして、多くの者が量的なものから質的なものに変化した、とも見える。イエスの言葉でその事態は急変し、「盲人は、すぐ見えるようになる(10:52)」。

イエスの言葉は一人の盲人にだけ響いたわけではない。群衆(10:46)の視線も「ダビデの栄光」を讃える数的な力から、貧しい盲人の物乞いへ転換した(10:49)。教会の役割は、この物乞いのようなものではないのか。

「イエスは、[何をしてほしいのか]と言われた。盲人は、[先生、目が見えるようになりたいのです]と言った(10:51)」。

分かっている、当人がそれを表明することを求めておられる。人は己を脚色して語り、脚色を己だと思ふところがある。イエスの問いは、私たちがぶ厚い衣を貫いて真実に触れる。「何をしてほしいのか」と。盲人は苦しみと貧しさに陥って切実であった、率直であった。幸いなことだ。恵みを受ける以前に、「盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た(10:50)」。

喜びを目一杯表して呼びかけに応え、視力を得て「なお道を進まれるイエスに従った(10:52)」。

「ひとつのことを神は語り、ふたつのことをわたしは聞いた(詩編 62:12)」。

一つは「力は神のものである(62:12)」こと。もう一つは「慈しみは主なる神のもの(62:13)」であり「ひとりひとりに、その業に従って、人間に報いをお与えになる(62:13)」こと。報いとは懲罰ではなく、あくまでも慈しみだ。

私たちはイエスの一つの言葉から、二つ、三つのことを聞かざらう。盲人の視力の回復は大きな恵みであり、群衆の視線の転換は新たな希望である。私たちは折々に、盲人であり、群衆なのである。



【おまけのひとつ】

小さな場なのに 歌をマイクで増幅する 人々は増幅に合わせて 無意識に耳を閉じながら聴く
歌には激しさも消え入りそうな調子もなく 平坦だった アンプが壊れた時 歌は瑞々しく蘇った